静岡大学附属図書館

図書館通信 —18—

1972. 11

もくじ

- 再び“あすの図書館のために”……1
- 私のすすめたい本……2
- 昭和47年度大学図書館職員長期研修に参加して……3
- 昭和46年度利用統計……4〜5
- 附属図書館委員会報告……6
- 東部地区図書委員会報告……6
- 学生購入希望図書……6
- お知らせ……6
- 人事異動……6

再び“あすの図書館のために”

八木達彦

本誌前号（17号）にいわゆる文科系の立場から近先生が本学図書館の問題点を指摘され、“より良き図書館のため”の提言をされた。正確なデータにもとずく建設的御意見、ぜひ御一読をすすめる。私も内容的に賛成だから、“前号に同じ”として何も書かなくてもよさそうである。しかし、実験を主とする研究者の立場から、図書の集中管理を行なうときの運用方法につき私見を述べたい。

限られた予算を効果的に利用するため、また、蔵書の重複を避けるためにも図書の集中管理方式がよいことは明らかであるが、実験書や最近の学術雑誌などは、手元にないと不便なことも事実である。実験の性質上ときには“時間外”に調べたいこともおこる。もし、図書館が時間外でも自由に閲覧できれば、すなわち希望者に表玄関の鍵をあづけてくれれば、ある程度この不便は我慢できよう。カリホルニア大の Radiation Biology 研究所では、research fellow 以上の研究者すべてに図書室の鍵が与えられていたことを思い出す。こうした場合ある程度の弊害も避けられまい。しかし、鍵を持つことのできる人を登録制にするとか、また、最重要の蔵書類と一般学術文献とを別室に管理するなど、運用面で工夫をこらせば実現不可能な案ではあるまい。なお、必要な実験書やデータブックの研究室貸出しはあまり規制しないでほしい。

われわれは、また、専門に関係のある学術論文は、常に目を通しておきたい。もし新着雑誌がすぐ書庫に“集中管理”されたのでは、新しい情報から遠ざかってしまう。教官の雑用が軽減され、図書館に出向いてゆっくり本に目を通せるような環境にでもなればよいが、とうてい望むべくもない。となれば、せめて教室の研究費で購入した雑誌や専門書は手許においておきたいという気持になるのも無理からぬことで、集中管理方式と相容れない。新着雑誌や図書の回覧サービスが可能となればこの点も解決されよう。つまり、各教室に回覧希望の雑誌名を申告させておく。部数は制限してもよいが、その教室で購入したものに限定する必要はあるまい。そうすれば、より広い範囲の文献に目を通すことができるし、期限がくれば本館におさめられる。もちろん人手の問題がからんでくるが、農学部分館との統合を期に考えられないだろうか？

現在、理学部が実質的に“分館”をもっている。理科系のものにとっては、この方が便利なことも事実である。農学部が移転してきたとき、また同じような希望がでるかも知れない。結局“本館でなければコレコレのサービスはできないのだ”ということになれば、また、そのことが皆に理解されれば、おのづと皆の希望もまとまってくるだろう。しかし、そうした配慮なしに、無理に集中管理方式をおしすすめれば反発をまねくだけである。

図書館は皆の共有財産であり、もっと蔵書を充実して、研究と教育に貢献できるよう整備されねばならない。そのためには、図書を購入するときに、“自分は何がほしいか”ということだけでなく、“本学図書館に何が欠けているか”ということも考えてほしい。こうして各教室の研究費で購入した図書により図書館は充実していくのだから、研究と教育に不便を感ずるような運営は改めてほしい。製本、整理に時間がかかりすぎる現状は何とか改善してほしい。みんなで協力して良い図書館にしていくことが、また、研究や教育を充実することにもなるのである。

（教育学部　教授　化学）

私のすすめたい本

漱石の作品

岡田英雄

情報時代には自分の内的要求や趣味によって本を選ぶことが難しい。一方でだからこそ選択がたいせつなのだということを痛感する。マス・メジアによってブームが作られると、読んでおかなければ時代にとり残されたような錯覚と焦燥を感じる。そうした人間心理をみとうして、ベストセラーのダイジェスト版を用意したり、※現代用語の基礎知識とかいう代物を出版して、時代病患者の処方箋としているむきもある。しかし文学作品は表現の中に感動が浸透しているので、ダイジェスト版などで渇きが満されるものではない。

そこで若い人には古典といわれる作品を味読することによって、作品に対する自分の心眼を養っておいてもらいたい。不易流行という言葉があるが、人間性の中の不易なるものに触れ、自分の世界を持って後、流行にも関心を払うのがいいと思う。古典は時代を超えて、そうした不易なるものを開示してくれるから尊い。何度読んでも、読むたびに新しい意味や問題を提示してくれるのが古典である。そういう古典をいくつか持っていることは、若い人がこれから辿る人生に、一つの灯をともしてくれるであろう。毛沢東主席が田中首相に楚辞集注を贈ったという話は快よいニュースである。この中国古典は毛氏も愛読していたものであろう。汨羅(べきら)に身を投じた屈原の、どのような世界が氏の魂を動かしたか知る由もないが、※楚辞の中の「漁夫」などは、中学時代の私の心にしみたものである。

ここに私のあげる漱石作品も、若い人々にはすでに古典となっている。近代百年の文学作品の中で、もっとも多く読まれているのも漱石の作品である。いわば国民文学といってもよい。しかしその与える感銘は人によって異り、読みかえすたびに意味を新に訴える。漱石の作品には人間の心理と倫理が描かれ、論理による展開と探求とがある。人によってはその余りにきびしい解剖に顔をそむけることもあろう。それでいてどこかに読者を魅了するものがある。漱石は文章はアトラクティーブでなければならぬと言った。この読者への暖い心遣いを感ちがいして、漱石文学には大衆文学的要素があるとして軽んずるやからがいる。いまそれを問題にするほど暇はないが、人間とは？人間

<5ページ左下へつづく>

『ガラパゴス—太平洋のノアの箱舟—』

(Galapagos. Die Arche Noah im Pazifik. 1960)

池谷仙之

ガラパゴスは南米大陸エクアドルから西へ千キロ、赤道直下の太平洋上に頭を出した大小17の島と無数の岩礁とからなる火山群島である。そして1835年、ビーグル号世界周航の途中で立寄った若き日のダーウィンに生物進化論への重要なきっかけを与えた島として、そのきびしい環境とその島固有の生物相はあまりにも有名である。ガラパゴス諸島とそこの特異な生物について最近多くの写真集と共に多くの本が出版され、それらは世界のあらゆる国語で紹介されている。昨年の暮、サンタクルツ島にあるダーウィン研究所を訪れた際、これらの世界の本が整理されているのを見た。その中で、滞在中、ベットにまで持ち込んで読んだのがここに紹介する本であった。その後、日本語版が出版されたのを知り早速に開いてみた。訳者はダーウィンの研究者として著名であり、その適訳は私を再びあの遠い不思議なガラパゴス島へ引き戻してくれた。著者は動物行動学者であり、その立場から動物の習性や行動の詳しい観察と実験など、高度な内容を盛込みながら、ガラパゴスの動物たちをきわめて興味深く記述している。本の内容は「太平洋のエデンの園」という章にはじまり、その一見平和な自然環境での「アシカとの友情」、「ゾウガメの国へ」、「恐竜の競技会」、「ダーウィン・フィンチ」や「ヨーガントカゲの物語」など楽しい動物との交友の物語が続く。これらの観察記録は短期日ではあったが、ガラパゴスで過ごした日々そのままを再現してくれ、更に行くことが出来なかった他の島々へ案内してくれ、そこでの奇妙な生物たちをカラフルな写真で紹介してくれている。日本から遠く離れたこの「進化論のふるさと」・「生態学の実験室」へ本書は容易に案内してくれる。地球上に残された生物たちのこの最後の楽園にも、人類は侵入しはじめ、エデンの園を荒廃しはじめた。島の代表的な動物は年々減少し、今や絶滅に瀕している。本書の最後の章では、これらの危機を訴え、自然保護の必要性を強く論じている。最後に植物生態家者の目で見た伊藤秀三著「ガラパゴス諸島」(進化論のふるさと)を合わせ読むと面白い。また、ガラパゴスについては次の書が日本語に訳されている。ダーウィン著「※ビーグル号航海記」・「※種の起源」・

<5ページ右下へつづく>

昭和47年度大学図書館職員長期研修に参加して　―報告並びに感想―

長南千恵子

私は去る47年7月25日から8月19日までの約4週間に渡って開かれた、文部省と図書館短期大学主催の昭和47年度大学図書館職員長期研修に参加しましたが、ここにその報告並びに感想を述べてみたいと思います。

研修会は今年で第4回目を迎えますが、本館からの参加は今回が初めてという事で、研修内容に対する期待や不安もさることながら、こういった比較的長期の研修会の開催及び参加という事は私達図書館職員の強い要望であっただけに、待望久しいという感が大でした。我が国における大学図書館職員の大半が、短期の司書講習等を受けたのみにとどまり、日頃現場において、明確なあるいは新しい指針を求めて悪戦苦闘している現状にある時、いかに自己研修に優る研修なし等と、理論をふりかざされても、それのみで全てが解決されるというものでもなく、新しい時代における図書館の在り方、又、当然あるべき図書館の在り方というものを、誰かに問い、そして自分の考え方というものを再確認し、更に前進したいという欲求は日々高まるのです。そういう意味で、直接図書館学の最先端の諸先生方に接し、講義を聞き、質問する機会を与えられた事は、何にもまして貴重な事であったと思います。又全国の大学図書館職員相互間で緊密な連絡を持つ機会もなく、半、孤立感をいだいている私達にとって、全国の図書館職員が一同に会する機会を得て、他館の事情を知る事が出来たのと同時に、何か非常な心強さと安心感も覚えるのでした。

研修内容は大学図書館の管理運営、資料論、図書館業務の機械化、そして参考図書の構成と利用という順に続きましたが、それぞれ適切な諸講師を得、図書館業務の現状を知り、更に将来を考えるのに役立ったように思います。又自分の現在行なっている仕事を、図書館業務全体、あるいは図書館学全体の中で位置づける事が出来た事、更に講義等を通じ、諸講師の日頃の研究態度、そして新しい方法を生み出そうとして苦心している様子等を垣間見る事が出来た事は、非常に感慨深いものでした。

今回の研修は機械化の問題と資料論も含めての参考図書の構成と利用の問題が中心となったように思います。機械化も又一部コンピューターによって作成されつつある二次資料等による参考図書の利用という問題も、いづれ近い将来、私共のような地方の大学図書館にも押し寄せてくる波である事は必須のようです。しかし機械化、参考図書の利用といっても、その底に流れる図書館における資料の整理、保管、そしてそれを元にしたサービスという流れは少しも変らないように思い、機械化の時代が来てかえって日常のあらゆる図書館的チェックというものが、より厳密化することを強いられるといった有様で、機械化即合理化にはならないという事を、更に実感として持った次第です。しかし機械化によって過去よりもより良いサービスが可能になる事は確かなようで、コンピューターを用いての雑誌目録、図書目録の作成といったようなものは数時間で出来上るのであり、従来数ヶ月を要するか、又は作成不可能であった事を考えても、図書館のサービスに新らしい面が開けつつあるのを感じないわけにはいきません。資料それ自体が個人に十分把握出来る量である場合には何ら整理、記録、保管といった手段は必要と認められないのですが、その量が一定の限度を超えた時、初めて必要となるのです。そして現在の情報量の増大に悩む社会は、多くの二次資料を必要とし、現在の一部二次資料の増大はコンピューターによって初めて可能になったように思います。

それと同様の事は参考図書についても言える事であり、自分の研究調査したいという範囲の資料というものが、自分の目や耳から入る限界を超えた時、個人の探索の域を超えた量になった時、初めて必要になるのかもしれません。そういう意味でも、一見手のかかる整理、記録その図書館におけるあらゆるチェックというものが持つ将来の意味という事を充分考える必要がありそうです。

私達は近い将来に機械化あるいは参考業務の拡大を求められています。それに対応して現段階で出来る事は何時コンピューター化されても機械に現在の業務を乗せる事が出来るよう自分の仕事をシステム分析しフローチャート化しておく事が第一ではないかという事でした。更に参考業務ですが、いわゆる目録、索引といったものが本館に準備されている量が少ないのには改めて心が寒くなる思いです。複写技術の発達は世界中の文献を容易に入手可能にしましたが、肝心の目録類がなくては資料の入手先さえわからず、又索引類の貧弱さは資料を求める道筋を中途で遮断されるのにも等しい事のように思えてなりません。全学的対策を望みたいと思います。色々と長くなりますので、

＜6ページ右下へつづく＞

昭和46年度利用統計

増加図書統計

分類	本館			工学部分館			農学部分館		
	和漢書	洋書	計	和漢書	洋書	計	和漢書	洋書	計
	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊
0総記	1,427	333	1,760	112	3	115	24	0	24
1哲学	623	331	954	27	1	28	3	0	3
2歴史	1,179	229	1,408	47	1	48	32	1	33
3社会	3,230	888	4,118	33	1	34	121	14	135
4自然	1,071	962	2,033	579	720	1,299	216	314	530
5工業	372	68	440	1,046	642	1,688	121	62	183
6産業	549	51	600	7	0	7	467	173	640
7芸術	521	87	608	6	0	6	5	1	6
8語学	406	301	707	46	12	58	16	0	16
9文学	1,852	1,350	3,202	15	0	15	3	0	3
計	11,230	4,600	15,830	1,918	1,380	3,298	1,008	565	1,573

開架、閉架別増加冊数

	開架	閉架	計
	冊	冊	冊
0総記	115	1,645	1,760
1哲学	80	874	954
2歴史	242	1,166	1,408
3社会	466	3,652	4,118
4自然	260	1,773	2,033
5工業	107	333	440
6産業	69	531	600
7芸術	46	562	608
8語学	38	669	707
9文学	328	2,874	3,202
計	1,751	14,079	15,830

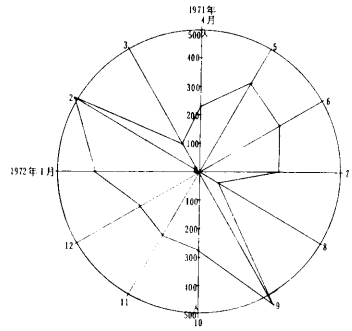
「開架」に指定図書・参考閲覧室用図書も含む。

入館者

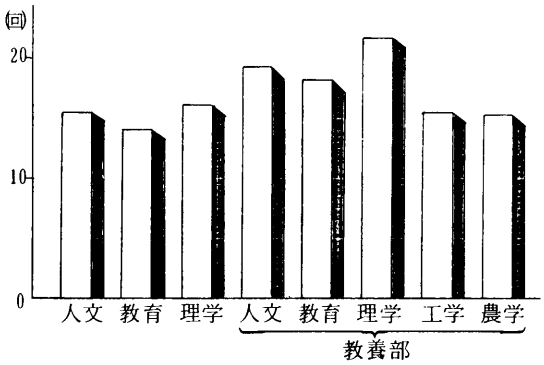
	学生	教室	職員	学外者	計
人数	67,182 (2,824)	837	72	94 (3)	68,185 (2,827)
計	70,006	837	72	97	71,012

(　　)内：延長開館時

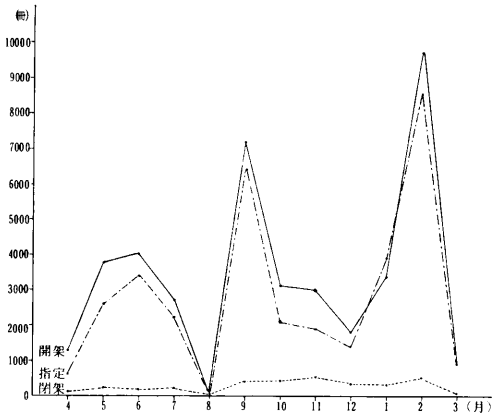
一日平均入館者数（学生）



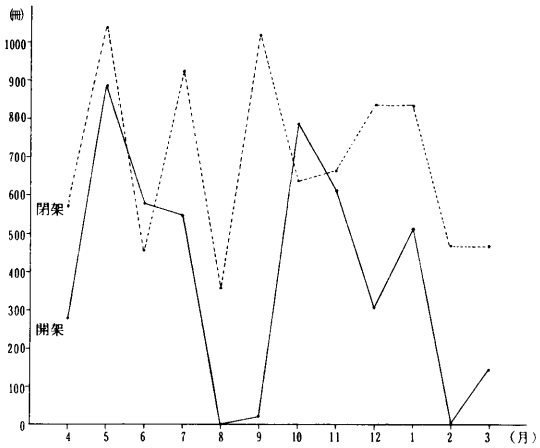
学部別学生入館回数（年平均）



月別図書閲覧冊数



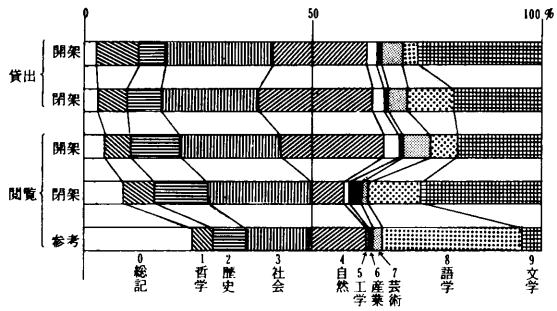
月別図書貸出冊数



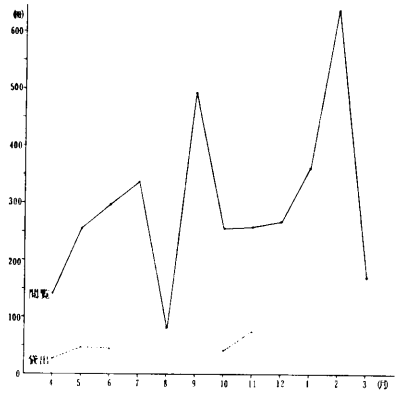
(注)

- 開館日数　230日
- 貸出統計　7・8・9・12・2・3月：学生ふつう貸出停止期間
- 「開架」：開架閲覧室に配架されている図書
- 「閉架」：書庫内に　〃　〃
- 「参考」：参考閲覧室に　〃　〃
- 「指定」：指定図書室に　〃　〃

分類別利用冊数（貸出・閲覧とも）



一日平均利用冊数



参考調査業務

取扱件数

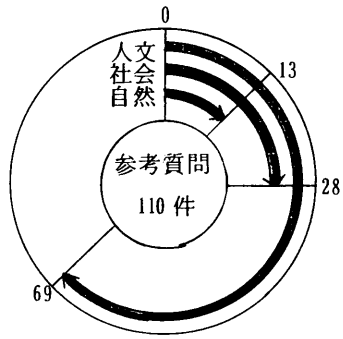
	学内	学外	計
件数（件）	465	78	543

受付日数：191日

	質問件数	質問者別				質問形式別		
		学生	教官	職員	学外者	口頭	電話	文書
簡単な質問(件)	279 (232)	170 (142)	53 (39)	5 (5)	51 (46)	221 (189)	56 (41)	2 (2)
参考質問(件)	110 (101)	51 (46)	28 (24)	16 (16)	15 (15)	73 (66)	35 (33)	2 (2)
計	389 (333)	221 (188)	81 (63)	21 (21)	66 (61)	294 (255)	91 (74)	4 (2)

46年6月8日－47年3月31日までのもの（　）内は人数

参考質問（主題別内訳）



昭和46年6月8日－47年3月31日までのもの
（受付日数　191日）

文献複写業務

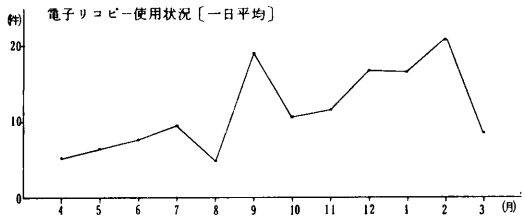
（学内）

	学生				教官			
	人文	教育	理学	教養	人文	教育	理学	教養
人数(人)	5	7	1	0	5	14	4	4
件数(件)	6	13	1	0	53	46	18	20

〔依頼先〕（　　）内は件数

東京大学(61)　国会図書館(20)　東京教育大学(8)
南山大学(10)　京都大学(7)　静岡大学農学部(6)
東京都立大学(6)　東北大学(5)
静岡大学工学部(4)　東京大学東洋文化研究所(4)
他

電子リコピー使用状況〔一日平均〕



<2ページ左下よりつづく>

性とは？と自らに問いかける人々は、漱石の中期以後の作品を繰り返し読んでほしいと思う。

学会では過去に漱石研究の高まりが何回かみられた。今また何回目かの高まりを来していることを参考までに記しておこう。　※印　本館所蔵

（教育学部　教授　国文学）

<2ページ右下よりつづく>

イアン・ソーントン著「ダーウィンの島・ガラパゴス諸島の生物たち」・ウイットマー著「ロビンソン・クルーソーの妻」。

ガラパゴス ―太平洋のノアの箱舟―

アイブル＝アイベスフェルト著　　八杉訳

（思索社　昭47刊　2700円）（理学部　助手　地学）

■附属図書館委員会報告

（第1回）　昭和47年6月20日　於　本　館

(1) 本年度指定図書購入費が東部地区図書館委員会で了承された旨説明があり、審議の結果専門課程も含め実施することを承認した。

(2) 図書館維持費所要額を審議、承認した。

■東部地区図書委員会報告

（第3回）　7月18日

(1) 指定図書シニア分を決定した（工学部分は移算）。ジュニア分は次回選定することとした。

（第4回）

(1) 教養図書購入費の使途を審議、決定した。委員選定分は早い時期に選定することとし、経費の東部各学部等の分担は東部図書館維持費検討委員会に付記することとした。

(2) 教養図書購入費（課外教育費）は学生数に応じ配分（両短大を除く）することとし、東部各学部等の配分は図書館に保留することになった。

(3) 指定図書ジュニア分を選定した。

(4) 学生用図書購入費の配分方法は第2回図書館委員会の決定通りとし、選定方法は次回審議することとした。

(5) 農学部移転に伴う図書受入について、館長より事務室の移転等も含め協力方が依頼された。

■学生購入希望図書 －購入決定のもの－

アメリカの憲法と政治　斉藤　敏　理想社
石田英一郎全集　第2・4・5　筑摩書房
英語学大系　第1・2・4　小泉　保　大修館
狼なんかこわくない　庄司　薫　中央公論社
オリエンテーリング－自然に挑む地図と磁石のスポーツ－　紺野　晃　講談社
近代日本社会思想史（上）（近代日本思想史大系）　作田啓一　有斐閣
愚者の饗宴　Cox, Harvey G.　新教出版社
憲法の現代的課題－宮沢俊義先生古稀記念－　有斐閣
立原道造研究　中村真一郎　思潮社
中世説話の研究　菊地良一　桜風社
中世文学の研究　秋山　虔〔編〕　東大出版会
調書（小説）　J.M.G.ル・クレジオ　新潮社
都市自治学説史概説　河野義克　東京市政調査会
女人和歌大系　第2　長沢美津　風間書房
白鳥の歌なんか聞えない　庄司　薫　中央公論社

お知らせ（本館）

(1) 冬季休暇中の長期貸出について（予定）

(イ)貸出冊数　4冊まで（指定図書は2冊まで）

(ロ)申込要領　◦窓口③番に用意してある所定の用紙を用いて下さい。
◦申込用紙には必ず指導教官、またはこれに代わるべき教官の捺印を受けて下さい。

(ハ)申込期限　11月30日(木)まで

(ニ)貸出日　12月7日(木)～9日(土)

(ホ)返却期限　1月11日(木)～13日(土)

(2) 通常の貸出の停止について
長期貸出準備のため11月24日(金)から停止し、1月16日(火)から再開します。

(3) 冬季休暇中の休館について
次の期間、休館します。
12月21日(木)～1月6日(土)

(4) 学生の図書館利用に関する特別措置について次のように変更します。

(イ)ゼミナールに用いるため借出す場合
2冊　2週間以内

(ロ)卒業論文に用いるため借出す場合
3冊　2週間以内
但し、指定図書及び特定図書を除く。

(ハ)学生の入庫について
指導教官が必要と認めたときは、その監督のもとに書庫内に立入ることを許可します。

■人事異動

－配置換－　（47.9.1付）
鈴木アツ子　総務係 → 本部庶務課文書係
鈴木昌枝　総務係 ← 教育学部会計係
成島　彰　総務係 ← 理学部会計係
島村敏子　整理係 ← 総務係

－新採用－　（47.10.1付）
海野博美　運用係

（左下よりつづく）
ヴェルギリウスの死　H・ブロッホ　集英社
法然上人伝の研究　田村円澄　法蔵館
民事訴訟法研究　第1・3・4　有斐閣
保田与重郎選集　全6巻　講談社
有機化学（上）　野副鉄男　広川書店

（3ページよりつづく）
この辺で終る事にしたいと思います。

研修期間中は一時学生時代に帰ったようで終始楽しく過すことが出来ました。忙しい業務の中を長期に参加させていただいた事に対し、他の職員の皆様にも深く御礼申し上げるものです。

（図書館員）

静岡大学附属図書館「図書館通信」　№18
発行所　静岡大学附属図書館　静岡市大谷836　TEL（37）1171・1188
印刷所　文　化　洞　静岡市大岩3－29－6　TEL（45）6260